

この旅の正味は8日間だったが、多くの忘れ難い記憶を私の脳裏に焼き付けた。それは、いつものごとく、異文化圏では感受性を高めるタチが関わっていそう。たとえばこのシャンドリア。この仕掛けに私は感心したが、妻は関心さえ抱かず、「面白い」から始まった。



澤渡夏代さんに妻は心惹かれ、私は19歳の時から世界に、それもデンマークに、そして今に…に脱帽。にもかかわらず、初の失態。土産の風呂敷をテーブルに活かしてもらえていながら、気づけなかった。柄選びをし、写真に収めながら、と妻は笑った。

実は、私は30代半ばから北欧に足を踏み入れるようになっており、いつしかスウェーデンやデンマークに移住したい、と考えるようになっていた。

この移住の夢は、結婚当初に、妻に伝えている。だからこの度のプランが持ち上がるや否や、旅行嫌いの妻が、「同行します」と手を上げた、と思った。



この男の子、何を言ったのか、今も気になる。これが分れば、デンマークにより1歩踏み込めそうだが、と考えたことを思い出す。勤労者博物館でのことだ。

そして、この3人と、旅は後半に移ることになった。妻が手を上げた動機は、このメンバー編成であったことが第1理由かもしれない。しかも、デンマーク。



「もてなし」の何たるかを学んだ旅でもあり、「ヒト」と「ヒト」はもとより、「ヒト」とイヌの間柄だけでなく、「人」とイヌの関係にも想いを寄せる旅になった。工業文明は、あらゆる「人」まで、すべてヒトに還元する魔力をもっており、引きつける。だが、その魔力は、

自然破壊を伴う工夫のもとに調合されていた、と気付かされ、やがて軸足の 1 本の置場を替えた。著作にも手を出し始めた 33 年前のことだ。

この 10 数年来、2025 年をエポックの年（「ヒト」が分水嶺に立ったことに気づく頃）と見て来た私だが、この旅はその想いをより強くさせた。それはデンマークで「ヒュッグ」という言葉の概念を語り合い、私なりの解釈を得たことが大いに関係している。

どうやらヒュッグは、「ヒト」がこの分水嶺を越え、「ヒト」とイヌではなく、イヌと「人」の関係になった時に、より味わい深くなる「値打ち」ではないか。

夏代さんは、日本で語られる「ヒュッグ」には、「チョットと違うところがありそう」との顔をされた。その「チョット」がより深く知りたくて、私は足掻き始めた。

だから、列車の「券売機」が故障していた時も、この「チョット」の探索好機と見た。それは「収入がなく、預金がないと、年金を全額もらえる」と聞かされた時から湧き上がった好奇心だ。私たち日本人とはまったく異なる受けとめ方があるようだ。それが、1 人当たりの GDP が最上位にあり、工業先進国でありながら幸福度も最上位にあるデンマークたらしめているのかもしれない。2025 年をひかえ、興味津々になった。

その後も、「子どもの骨折」時の優先順位付け。「砂糖に課税」。絵はがきの切手代とプライオリティの発想。あるいは「ヌードのモニュメント」を滑り台にさせている、などに触れ、次第に焦点が絞られてゆくような気分になった。

だから、21 世紀は人間の定義のし直しを課題にする、とのかねてからの想いを再確認させられ、追認する旅にもなった。

確か、腕を折った子は、薬局訪問時に Bente から「今日、処置をしてもらえ、切開手術は不要だった」と聞かされた。その安堵の様子をうかがいながら「その医者とは…」と、とても気になったことがあった。その医者は、その子を一旦診た上で優先順位を下げ、帰らせたのか、あるいは…だ。ひょっとしたら、こうしたことの積み重ねが、この国の愛国心を育んでいるのかもしれない。



Kaj と Bente を京都に迎えたら、この山門まで散歩をしよう。小学 1 年生の夏休みまでの登校時に、毎日眺めた山門だ。2 学期になると見なくなったが、その間に日本には恰好のエポックがあった。だが、日本は生かせなかった。残念なことだ。

日本は「清貧」を尊ぶ文化を育んだ国だ。「清豊」の文化を創出する遺伝子を、日本人は秘め持っているに違いない。そうと私は睨み、「清豊」を私は追い求めて来た。この概念は「ヒュッグ」と、とても近い関係にある、相似している、とこのたびの旅で知るところとなった。付度という言葉に卑しめた日本だが、立ち直ってほしい。